

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

明治十二年第千二百七十八号

(発行年 / Year)

1910

明治十二年第四百七十八號

裁判言渡書

新瀉縣越後國北蒲原郡新發田杖木町士族白勢和一

郎代人

東京府麹町区下二番町四十一番地士族大野誠方寄留

新瀉縣平民

原告

清野誠一郎

新瀉縣越後國北蒲原郡笠柳村平民和田久藏外廿七

名總代

右同郡藤寄村平民

被告

泉

東京控訴院
祐四郎

右同郡浦入村平民

同

畠山太郎太

分地契約取消ノ詞訟新瀉裁判所ノ裁判不服ノ扣訴審理判決尤ノ如シ

第一條

被告於テ其第一号証ノ成立ハ越後國北蒲原郡木寄村ノ地内ニシテ往古水面場字前瀉新田ト称スル地所旧發田藩士溝口半兵衛所有ノ砌リ悉ク不毛ノ地ナリシヲ去ル文化年中小作人共自費勞力ヲ以テ之ヲ開墾シ同十酉年ニ至リ被告第二号証ノ通地所一及歩ニ付敷金貳圓

ツ、小作人ヨリ地主へ預ケ談地ノ永小
作者トナリ其收獲高ク地主小作人折半
ニ貢租ハ地主ニ於テ辨納シ其他ノ諸費
ハ小作人ニテ支出スル丁ニ確定セリ故
ニ被告カ談小作者ノ名義ヲ讓受タルモ
談地開墾ニ係ル入費ト労力トノ料トシ
テ被告第三号証ノ通リ高價ヲ以テ之ヲ
讓受ケル未小作仕未ル旨申立ルト虽モ
原告第一号証則被告第二号証書第一項
ニ前書ノ通此方抱前瀉新田小作人共願
ニ寄敷金相納承小作申付矣ト有之其第
三項ニ取箇米未納者何義ニヨラス地主
ハ封シ不墾ノ仕向有之、於テハ敷金一
町歩ニ付貳拾兩ノ割ヲ以テ差戻シ小作
地引揚ケ可申ト有之ヲ見レハ此永小作
ノ名称ハ全ク一町歩ニ付貳拾兩ノ敷金
ニ依リ成立テ契約ニ隨ニ敷金返還ノト
キ消滅スルモノニテ開墾ノ入費労力ア
ルヲ以テ永小作ノ名称ヲ得タルモノニ
非サル丁明ナリ又被告第三号証書ヲ見
ルニ前書ノ小作地御地主様へ差上矣敷
金形一及歩ニ付式兩積リニテ只今慥ニ
受取名前替御願申上貴殿へ讓渡申所実
正ニ御座矣ト有之而シテ前段第二号証
書第二項ニ小作地ヲ讓地又者質入引当
ホ、指入矣義決シテ不相成矣尤勝手ニ

付預リ名前替致度者共ハ支配人迄願出
可仕指圖マト有之則第三号証書ハ右第
二項ニ照準シ特ニ其名前替ヲ為シタル
モノニシテ素ヨリ地所賣買ノ効アルコ
非ナルコトハ勿論之ヲ以テ此承小作ハ自
費開墾ニ因テ成立タル証拠ト為スヘキ
理由ナシ其金額ノ一及ニ付武両ノ割合
ニ超過アルモノハ只是名前替ノ趣意金
ニ止ルモノト見做サ、ルヲ得ス

第二條

被告於テ明治六年地租改正ニ際シ新瀨
縣廳ヨリ被告第四號請書ノ通小作地云
々ノ論達アリシヲ以テ地主小作者熟議

東京控訴院

ノ上該地ノ内五分六厘ハ地主則原告ノ
所トシ殘ル四分四厘ハ小作者則被告ノ
所有ト分離ノ契約ニ及ビ則戸長連署ノ
第一号証成立タル旨申立ルト雖モ右被
告第四号証則原告第五号証請書ナルモ
ノヲ見ルニ從前中小作ト唱ヒ小作ヲ抹
式ノ如ク取扱中小作付、地ハ地主ニ於
テ小作入替ホ自由不相成ハ勿論手作モ
不相成ハ畢竟中小作ノモノヨリ取受ケ
テ德米ヲ金利ト見成シ地所ノ廣狹善惡
ホニハ不拘地位相當ヨリハ不足ノ金高
ヲ以テ相求メ其故ノ義云々且賣預リ地
ト唱ヒ地位相當ニ無之金高ヲ以テ質入

致シ年季明ニ至リ莫テモ地所不引渡其
終賃入主直小作致シ地主へ納米徳米ノ
外下小作人へ増入付等取計美分ハ中小
作同様ノ筋ニテ云々ト有之是ホハ最初
賃取主又ハ買取主ニテ地位相当ヨリ不
足ノ金高テ以テ地所相求ムルニ付其賃
置主又ハ賣渡主ニ於テ幾分欺其地所ニ
対シ共有權アルヲ認諾セシモノヲ云
ヘルナリ故ニ談論地ノ如キ賣買主又ハ
賃取主ト賃置主トノ間ニ出テタルモノ
ニモ非ラス全ク一反歩ニ付式兩ノ敷金
ニ因テ成立タル稱呼ナル永小作地ニ適
用スヘキ筋ナキモノナリ

東京控訴院

第三條

被告ニ於テ原告請求ノ精神ヲ熟考スル
ニ元該地ハ小作人ノ自費開墾ニ係ルモ
歛下年限ヲ映ヘアレハ已ニ其勞費ハ報
償セリ唯敷金差入タルニ依リ永小作ニ
卸付タル所以ナルニ尋常ノ永小作ト
視シ歛契約ニ及ヒシハ錯誤ニ由ツルト
云フニ過キス抑モ不毛ノ地ヲ開墾ナス
ニ僅々ノ歛下年限ヲ映ヘタレハトテ其
入費ト勞力トヲ償フニ満足スルノ理ア
ランヤ決シテ然ラサルハ被告第二号証
ノ如ク該地ノ收獲ヲ地主小作者折半ノ
契約ニテ永小作ニ卸付タルヲ以テ明カ

ナリ枉テ原告ノ供陳ニ從ニ數金差入
タルヨリ永小作ニ卸付タルモノトスル
モ僅式四ノ數金アルヲ以テ永年該地ノ
收獲ヲ折半シ其所得權ヲ小作人ヘ付與
スヘキ、道理アラサル者申立ルト虽モ
當時銀下年限ニテ満足セサリシ入費ト
労力トヲ償フニ足ラサリシト認ムヘキ
概ロナキハ勿論當時銀下年限ヲ定メ開
墾ヲ為ス者ハ則是契約上ヨリ成立モノ
ニ付役令入費労力ト其所得ト相償ハサ
ルモ其契約ハ履行セサルヘカラス況ヤ
已レノ見込ニ違背シ損分アリトテ其地
ノ所有權ニ攜ハル理由アラシヤ且原告

東京控訴院

第二号証書第一項但書ニ小作人開墾出
精ノ誤ニテ当分四分取ニ相成居リ其事
ト有之ヲ見レハ當時開墾ノ報酬ヲ行フ
タルヲ知ルヘシ又被告第二号証書ニ五
分取トアルハ則ち永小作タル取箇ニシ
テ其永小作タルハ則ち數金ニ定タルハ
ハ右二号証書契約ニテ明亮ナレハ今其
取箇ノ少キヲ以テ開墾ノ入費労力アル
ニ依リ幾分數ノ共有權アルニ定タルモ
ノト認ムヘキ理由ナシトス

第四條

被告ニ於テ原告初審口供第九項ニ被告
共前條ノ如ク自費ヲ以テ開墾致スニ付

半左上門於テ該地ヲ永小作ニ卸付今以
テ相統小作罷在まト有之上ハ被告共ノ
自費ヲ以テ開墾シタル緣故ニ因レル永
小作ニ相違ナキ旨申立ルト虽モ原告ニ
於テ右ハ初審口供總體ノ趣意ヲ通覽セ
ハ原告ノ精神ハ決シテ自力開墾ニ因由
ニタル永小作ナリト云フニ非ラサル了
明瞭ナル旨申立ルニ付原告初審ノ口供
ヲ閱スルニ口供第四項ニ該地ハ元溝口
半左上門ノ所有中被告共ヨリ永小作ノ
敷金トシテ一反歩ニ付金貳兩ツ、差出
レ有之云々第八項ニハ被告ノ資力ヲ以
テ開墾致サセ右開墾ノ難易、依リテ三

東京控訴院

ケ年乃至五六年ノ銀先年限ヲ共へ有之
云々追加第六項ニ右開墾費ハ最初ニ銀
先年限ヲ共へ無税ニテ耕作致サセ有之
之ヲ以テ開墾費ハ既ニ原告ヨリ償却満
ノモノニ付更ニ其後ノ讓受人ヨリ取受
ル筈ハ魚之第七項ニハ被告ニ於テ開墾
費ハ銀先三ケ年ニテハ所詮不足ナル旨
申立矣得共旧未不足ヲ以テ苦情申立タ
ル儀ハ魚之且實際作付ニテハ多分ノ得
益モ有之タルニテ決シテ作付後ノ三
ケ年ニ被告ハ不足魚之云々亦有之開墾
入費勞力ノ償ハ既ニ満足セシメタル一
ヲ屢々申立タルハ則チ右入費勞力ナル

アルヲ以テ永小作トナレタルニ非ルト
ノ趣意ナルハ明瞭ナレハ第九項ノミヲ
以テ原告自認ノ証拠トナスニ足ラス

第五條

被告ニ於テ其第一号証書ハ戸長ノ連署
アリ一点ノ欠ク所アラサレハ完全ノ契約
タル論ヲ俟タス況シヤ原告被告及ヒ戸長
連署ヲ以テ縣廳ヘモ分地届出而シテ地
引圖地引帳ニ至ル迄原告カ認許ノ上被
告ハ名受調印ナシタルハ業已ニ該地ノ
所有權ハ被告ヘ轉移セシテ明瞭ナル旨
申立ルト虽ヒ戸長連署又ハ縣廳ヘ届出
地引帳調印ホノ手續ハ皆以テ第一号証
書ノ成立タルニ因ルモノナレハ右一号
証書ノ全ク錯誤ノ契約ニシテ効ナキ場
合ニ於テハ是ホノ手續アルヲ以テ右一
号証書ノ契約ヲ補助スル理由トナスヲ
得ス

東京控訴院

第六條

抑談訴論地ハ被告第四号則原告第五号
証書ニ所謂中小作賣預リト全ク性質ヲ
異ニシ一丁歩ニ付廿兩ノ敷金ニ因テ永
小作ノ名称ヲ付シ其敷金返還ノトキ永
小作ノ名称ハ隨テ消滅スルモノニテ其
小作人ホカ談論地ニ對シ幾分欺ノ共有
權アルモノト認ムヘキ道理ハ絶テアラ

サレナリ然ルニ原告共縣廳諭達ニ所
謂中小作ト同視シ分地ノ契約ヲ為シタ
ルモノハ全ク錯誤ノ契約ナレハ其効ナ
キモノト可相心得美事

但扣訴入費ハ規則ニ照シ被告ヨリ原
告ニ償却スヘシ

明治十三年二月廿八日 東京上等裁判所

東京控訴院

東京控訴院